

## 平成 20 年度 院生による 1 年間・2 年間の総括的評価

遺伝カウンセラーコース 感想

M1 ○○ ○○

入学してもうすぐ 1 年になります。前期は毎日朝から晩まで講義という日が多く、その内容を整理して理解するという作業が大変でした。毎日が規則正しい生活でしたが、時間も精神的にも余裕がなく、慣れない生活のためか体調も悪く 8 月まではとにかくしんどかったです。しかし、優秀な先生方のもと少人数で勉強する機会を得る事ができたこと、学友に恵まれたことは大変幸運だったと思います。興味のある分野を勉強することはとても楽しく、新しい発見にわくわくしました。様々な学会やセミナーに参加した事も、専門分野の先端の知識を学ぶ事が出来、また先生と一緒に学ぶ人たちのつながりを持つ事ができ大変有意義であったと思います。

後期に入ると実習が入り、クライアントから現実の生活や将来的なことなどに関する問題や、悩みを聞かせていただき、机上では学ぶ事の出来ない遺伝カウンセラーとして考えていかなければならないことを勉強させて頂いています。時間的には前期より余裕が出来て精神的にも少し楽になったように思います。

授業はほぼ終わってしまうのですが、まだまだわからないことが多く、勉強する事は無限大であると思います。春からもできるだけ授業に出席したいと考えています。

課題研究については、研究の経験がほとんどないので大変不安です。先生方には、いろいろとご指導いただかなければならないことも多くなると思います。

遺伝カウンセラーという職業については、自分自身、入学前には漠然としたイメージしか持っておらず、現在まだ遺伝カウンセラー像を模索中ではありますが、世間的にもまだ認知度も少なく職業として確立したものではないので将来的にどういう形で働いていけるか、年齢的にも働く機会があるのか大変不安です。しかし貴重な時間とお金を費やして勉強する機会を得たのだから、この経験をできるだけ活かせる場で働きたいと思っています。

遺伝カウンセラーになるための勉強をする機会を与えてくれた国と先生方に感謝しながら、勉強を続けていきたいと思っています。

2009年1月30日(金)

遺伝カウンセラーコース

〇〇 〇〇

## 1年間を振り返って

2008年4月に入学し、遺伝カウンセリングの勉強を始めてもうすぐ1年がたとうとしています。内容の濃い毎日を過ごしていたため時間の流れがとても早く、入学した日をつい最近の出来事のように感じています。充実した1年間を振り返ることで、来年度の学びにつなげたいと思います。

遺伝カウンセラーコースのカリキュラムは講義・実習・課題研究の3つに分けられます。1つ目の講義は遺伝カウンセリングに関わる遺伝医療やコミュニケーションに関する遺伝カウンセラーコースの科目の他にも社会健康医学系専攻の必修科目の統計学や疫学があります。これらは入学して初めて知る内容がほとんどである上に、学ぶ分野も多岐に渡っているため、休まずについていくことで精一杯で余裕を持って講義に臨むという姿勢ではなかったことを反省しています。また必修科目は受講したものの、必修以外の科目はほとんど受講していないので、その時の状況を考えつつ来年度も興味のある選択科目を受講し、今後のために学びを深めていければ、と思っています。遺伝カウンセラーコースの教員・社会健康医学系専攻の教員だけでなく、外部の先生の講義も多く、色々な方のお話を聞くだけで刺激になります。多くの先生方から学ぶ機会の多い現在の環境は、いつも贅沢だと感じています。2つ目の実習は後期から始まりました。実習施設は京大病院・大阪市立総合医療センター・兵庫大学病院の3つで、それぞれ雰囲気も内容も異なり、実習に参加する毎に新たな発見があります。実習でクライアントの方や遺伝カウンセリングを行う担当医の先生や心理士の先生の姿を見ることで、講義だけでは分からない実際の遺伝医療の現場とそれを取り巻く環境の一部を知ることができ、考えさせられることも多くあります。3つ目の課題研究は今ようやく始まったばかりという状況です。先輩方の研究を進める姿を見て自分を振り返りながら、また先生にアドバイスをもらいながら手探りの状態で、学部の頃にもう少し真剣に研究に取り組んでいれば、研究の流れも分かり余裕を持って取り組めたのでは？と反省する日々です。

このようにその時その時にある課題をこなしていたらあっという間に1年目が終りに近づき、遺伝カウンセラーコースで勉強できる期間も残り1年となりました。まだ卒業後の姿はイメージできませんが、悔いの残らないようにしっかり勉強したいと思います。

## 1年間を通じての感想

遺伝カウンセラーコース M1 ○○ ○○

前期では SPH の必修科目と遺伝カウンセラーコースの必修科目があり、それぞれの科目について今後の基礎もしくは足がかりにしたいと思っていた。そのような中で、SPH の学生として、遺伝カウンセラーコースの院生として、自身の立場を模索することもあった。

前期では遺伝カウンセラーとしての基礎的な知識を学ぶ機会が中心となっていた。そのため、遺伝カウンセラーとしての態度を考える機会があっても曖昧のまま後期となったが、曖昧さが悪いという感じはなかった。このような期間の中で遺伝カウンセラーということを試行錯誤することは私にとって重要であったと思うからである。授業に関しては厳しい状況もたくさんあったが、必要な知識について集中的に全体像の把握ができ、限られた時間内で多くのことを学ぶことができた。

後期に入り、実習が始まってからは実際の現場に同席でき、とても貴重な経験であると思っている。クライアントの感情・表情などや遺伝専門医の態度から、私自身が考え、感じ、何らかを吸収し、いまだ模索しているものの、現実として目の前に遺伝カウンセリングがあるという実感と責任の重さを実感している。しかし同時に、知識が充分でないと自覚することも多く、前期での知識以上のものが必要であり、さらに努力が必要である。

後期の遺伝カウンセラーコース必修授業の中にロールプレイがあるが、ロールプレイをする中で、自分の苦手なところ、また、限界と感じる場面も多く、遺伝カウンセラーとしてどのような存在でいるか考える機会を多く与えられたのは貴重であった。これは同時に、実習後にスーパーバイズを受けることができ、ケースのフィードバック、共有・確認などを他者と話し合える機会を得ることができ、とても重要で欠かせないものとなってきている。今後も自分のできること、あるいは限界を吟味しながら、遺伝カウンセリングの陪席を行っていきたいと考えている。そして、チーム医療としての関わりでは、クライアントや遺伝専門医に求められている遺伝カウンセラーとしても模索していきたいと思っている。

今後は課題研究にも取り組まなければならないが、実習や合同カンファレンスは続いていくので、どれも丁寧に行っていく努力をしていきたいと考えている。

## 一年間を振り返って

### 遺伝カウンセラーコース M1

#### 1. 社会健康医学系専攻について

本学の遺伝カウンセラーコースは社会健康医学系専攻に属しており、公衆衛生学の基礎も同時に学べることは大きな魅力である。そのお陰で、制度や経済など医療システムの全体像を見通しながら遺伝カウンセリングの在り方を考えるという広い視野を持つことができた。その一方で、課題研究などではどうしても社会健康医学としての視点が要求される傾向がある。そのこと自体に問題はないが、遺伝カウンセリングの中では社会健康医学的な視点は一つの見方でしかないことを学生個人が念頭に置く必要があり、論文や学会参加を通じてより多角的な視点を養うように心掛けたいと思う。

#### 2. 遺伝カウンセラーコース専門科目について

遺伝学や倫理に関しては十分かつ高いレベルの講義が提供され大変満足のいくものであったが、それに比較するとコミュニケーションの講義が週一回のみというのは少し不安を感じた。遺伝学などに比べコミュニケーションを独学で学ぶことは難しく、講義としてももう少し提供してもらえると有り難い。コミュニケーションの指導教官は講義時間外にも学生に非常に親身に対応して下さったが、教官が一人であるため学生からの相談が集中してしまったように思う。病院実習やロールプレイ演習などでは、本コースの先輩方も含め心理面でのスーパーバイザーが複数人いると非常に心強いと思う。

#### 3. 病院実習について

本学では複数の医療施設において複数の臨床遺伝専門医から指導を受けることができ、それぞれの先生のスタイルや考え方を幅広く学べるという点で非常に恵まれている。カリキュラムの中でも病院実習が最も学ぶべきところが多いと感じており、2年の前期で実習が終了してしまうのは少し残念な気もしているが、課題研究や後輩への引継もあることから、この点については合同カンファレンスなど症例を共有できる場を有効に活用するようにしたい。

#### 4. 学会、セミナーへの参加について

1年次から学会やセミナーに参加することにより、早い時期から問題意識に触れ、また人的交流を持つことができたのは貴重な機会となった。この点は是非継続して頂きたい。

以上、本文では敢えて今後希望する点を中心に述べたが、遺伝カウンセリングを学ぶ場として本学は非常に恵まれており、先生方には大変感謝している。2年という短い期間の中で、実践者及び研究者としての遺伝カウンセラー養成プログラムが準備されており、これを最大限に活用できるかどうかは私たち学生の努力次第であろう。

## 遺伝カウンセラーコースでの1年間

〇〇 〇〇

ヒトゲノム計画のことをテレビやマスコミを通して知り、ヒトの遺伝子に興味を持ち、今後研究が進む中で社会にどのような影響を及ぼすのかといったことを知りたい、勉強したいと思って入学した4月。『臨床遺伝・遺伝カウンセリング』の授業の最初のイントロダクションの資料を見返してみると、「遺伝カウンセリングとは何か、を簡潔に記載しなさい」という質問に「遺伝カウンセリングとはクライアントの遺伝相談に対して、理解し、情報を提供し、自己決定をサポートすること。」と答えていた。教科書に書いてあるような文句をそのまま書いた。遺伝カウンセラーコースで1年間学んだ中で、この文句に対して実感、具体的なイメージ、自分なりに考えることなどが出てきたことが一番成長したことだと思う。

まず、前期は授業を通してしっかりと基礎を身につけることができたと思う。「遺伝医療と倫理」では遺伝医療を取り巻く問題、制度などを学び、「基礎人類遺伝学」では遺伝学の基礎を、「臨床遺伝・遺伝カウンセリング」で臨床的なことも学ぶことができた。入学前は分子生物学的な遺伝子のお話を少し知っていただけでわかったような気になっていたが、それだけでは何の議論もすることができないということが今ではよくわかる。基礎を授業という形でしっかりと勉強できたことは本当によかったと思う。また、「遺伝カウンセラーのためのコミュニケーション概論」では対人職として、チームで働く職種として、コミュニケーションについて今まで考えもしなかったことを考察する機会を得ることができてとても良かった。

後期からは学会・セミナー等にたくさん参加できたこと、実習が始まったことで前期に学んだことの理解がさらに進んだように感じた。学会・セミナーでは内容はもちろんのこと、全国の先生が集まっていて、直接講演を聞けることがとても刺激になったし、遺伝医療の現状について知る勉強にもなった。実習では今もまだ戸惑うことも多いがその分考えさせられること勉強することが多く、今後も頑張って成長したいと思っている。

この1年、本当に良い環境に恵まれ、成長できたと自分では満足している。しかし、同時に基礎的なことも、実習でもまだまだ勉強が足りないことを思い知らされる毎日である。また、これから課題研究にも取り組んでいく中でもあと1年、もっと成長できることを自分に期待している。

最後になりましたが、この1年、ご指導いただいた先生方、また支えてくれた教室のメンバーに心から御礼申し上げます。これからもよろしく願致します。

## ユニットでの1年間

### 遺伝カウンセラーコース M1 ○○ ○○

この感想文を書くにあたり、入学して1年が過ぎようとしていることに改めて気づき、不思議な気持ちでこれまでの日々を振り返っています。

入学した4月から7月までの前期は、授業とレポートに追われて全力疾走の毎日でした。遺伝子や遺伝病、医療倫理や遺伝カウンセリングを学ぶ遺伝カウンセラーコース（GC）の専門科目はもちろんのこと、社会健康医学系専攻の必修科目である医療統計や疫学、医療マネジメントなどの授業もあり、1週間が3か月や半年に感じたほどでした。目が回るほどの忙しさと新しい情報を理解することの難しさという苦労の一方で、長年勉強したいと願ってきた遺伝や医学について一流の教授陣から指導を受けている現実に気づき、「私はなんて幸せなんだろう」と震えるような気持ちになったことが何度もありました。

一流の教授陣というと、難解な言葉を用いたハイレベルな授業を想像するかもしれませんが、生徒の中には医療系出身者でない人もいるため、噛み砕いたわかりやすい言葉を用いて、且つハイレベルな授業が行われます。そして、質問がある場合には授業中も授業時間外でも両手を広げて対応していただけます。自分が前向きに取り組めさえすれば先生方は十分にサポートして下さるので、大変な勉強も安心して進めることができました。

ユニットは、GCと臨床研究コーディネータコース（CRC）が合わさったものですが、私たちの学年はそれぞれ6名ずつの12名です。専門の授業の多くは近畿大学のGCの4名に加えてCRCの方々も選択されていたため、異なる視点からの質問や意見を数多く聞くことができました。また、専門外であるにも関わらず理解が深いことに驚いて、自分もさらに勉強しなければ、と刺激を受けたことも少なくありませんでした。

10月からの後期では実習がスタートし、授業も遺伝カウンセリングのロールプレイなど、前期で学んだ内容を実践する機会を多く持つようになりました。現場で経験することにより頭の中の情報が整理され、平面的な知識が立体的なものに変化していく過程を感じます。また、経験豊富な先生方の遺伝カウンセリングに同席して、遺伝カウンセリングの方法だけではなく、人間としてどうあるべきかを学ぶことも多く、この恵まれた環境で学べることの喜びを感じています。

GCの院生として学ぶ時間はあと1年です。毎日を大切に真剣に過ごしていきたいと思っています。

## 遺伝カウンセラーコースで2年間学んで

2009年2月6日提出

遺伝カウンセラーコース M2 ○○ ○○

あっという間に2年間が過ぎました。昨今の頃「1年間学んで」と感想文を書いたものを読みなおすと、この1年間は、また別の深みがあったことを実感しました。

1年生の前期では、おもに講義中心に学びました。社会健康医学系専攻の講義では幅広く、医療倫理学、行動学、医療統計学、環境科学、医療マネジメント、疫学、健康情報学、社会疫学、臨床医学概論など、それぞれの授業がとても充実していました。遺伝カウンセラーコース専門の講義は、もどれも最先端の情報かつ専門性の深いものばかりで、今でもなお復習が必要で、これからはきっと自分が遺伝カウンセリングの分野に携わっていく上で、何度も見直す貴重な学びになると思います。

1年生の後期からは、演習が増え、実習が始まりました。2年間の学びの中で、私にとっては実習によるものがとても大きかったです。兵庫医大での実習は日に2～4ケース実習させてもらいました。相談の主訴として、出生前検査についての相談で来談されますが、それぞれのケースの妊婦さんによって、背景も違い、疑問も、心配も違っていました。もちろん、実習の経験を重ねるにつれて、多くの人々が共通して悩む部分もあるように感じました。妊娠中という時刻が刻々と過ぎていく中での検査の決定や実施の調整はとてもデリケートで、その中で命にかかわることに携わることは、その人の人生にとっての重大な内容で、妊娠中の心配から、生まれた後のこと、生まれた子が育っていく先のことなど、将来を含めた相談になるということを知りました。

大阪総合医療センターと京大病院の小児療育外来の実習は、私の視野を広げました。日常生活の中で、どういう医療を継続していくのか、どういうケアが必要で、さらに発達段階に応じて本人は、また両親は何を問題に抱えるのか。医療だけではなくどのような支援が必要なのか。多くの外来患者さんに出会うことで、その人の暮らしを考える場として、とても勉強になりました。実習の場は外来受診の一部という医療の場ですが、遺伝カウンセラーがクライアントさんのニーズにどう対応するかを考えた時、医療に限られない、つながりの必要性を感じ、今後も考えていきたいテーマをここでもらったと思っています。

また、京大病院、大阪総合医療センターの遺伝カウンセリング実習は、私の経験する実習の中で占める数は多くありませんが、学びとしてとても大きな部分を占めます。一つ一つの実習がどれも印象に残っており、実習の学びから課題研究のテーマに取り組めたことも、私にとって本当によかったと思います。遺伝カウンセリングがまさに双方向のコミュニケーションとして成り立ち、クライアントにとって私たちがいかに援助者として現れることができるかを考え続けてきたように、今後も考え続けていくのだと思います。

この2年の学びを自分なりに生かし、私たちがどのような役割を担い、いかにクライアントさんにサポートを届けられるのか、気持ちを新たにして、2年前の春、入学のときの期待は、未だ私の中で膨らみます。

## 遺伝カウンセラーコースの感想

〇〇 〇〇

この2年間は、今から振り返ると本当にあつという間でした。いつもいつも何かの課題に追われていて自分に余裕がなかったからかもしれませんが、でもこの2年間で京大の遺伝カウンセラーコースで過ごせたことは、よかったと思っています。

私は入学した時点では、課題研究として何かしたい、とか研究がしたくてこのコースに入学したわけではなかったのですが、実習を通して考えることがあり、課題研究に取り組めて本当によかったと思っています。課題研究を通して、ほんの一端ではあると思いますが、研究というものが学べたと思っています。また、京大の遺伝カウンセラーコースはSPHの中に設置されているので、疫学的手法についても学ぶことができたと思っています。

実習については、私たちは4人で電話当番や実習施設を担当していましたので、4人でまわすのが大変ということはありませんでしたが、その分多くの症例に陪席させていただく機会があったことはよかったと思います。電話の対応も、他の養成コースでは修士の学生が実際に対応していることは少ないと思いますので、貴重な体験であったと思います。しかし実習がはじまった最初の頃は、多くの症例に入らせていただける反面、自分の中でまだ消化しきれないうちに新しい症例に入らせていただく、という状態が続き、もっと一例、一例について担当の医師や心理カウンセラーとみんなでディスカッションできる時間があればよかったなと思います。

また私がこのコースで2年間学び得られた財産は、いろいろな人たちとのつながりです。違う教室の友人たちは、それぞれに自分の夢があり、それに向かっている人たちばかりで、話をするたびに自分も刺激されます。これまでの経験も向かっている夢も違う人たちばかりだからこそ、学べることが多く、京大に来ていなければ得られなかった出会いであったと思っています。そして学会やセミナーを通して出会えた、遺伝カウンセリングに関わる担当者の方たちとのつながりもとても貴重なものだと思います。学生として学校に通っているだけでは、とてもできなかったつながりなので、積極的に学会やセミナーに参加させていただけたことに感謝しています。

そして最後に、この2年間を通して講義、実習、課題研究と最後までサポートしてくださった先生方に心から感謝申し上げたいと思っています。ありがとうございました。

## 遺伝カウンセラーコースで学んだ2年間の感想

### 京都大学大学院医学研究科社会医学系専攻遺伝カウンセラーコースM2

〇〇 〇〇

京都大学大学院遺伝カウンセラーコースでの2年間は、大変充実した2年間であり、既存のテキストだけでは得られない多くの貴重な体験をすることができた。以下に、講義、実習、研究について具体的に述べていく。

講義では、基礎的知識から臨床的な知識までを学ぶことができた。遺伝医療と社会の講義や学会・全国遺伝子診療部連絡会議などでは、最先端で活躍される諸先生方から最新の知見や今現場で問題となっていること、遺伝カウンセリングで何を大切にしているか等について直接お話を聴く機会を与えられ、クライアント・医療者・社会から求められる遺伝カウンセラーの役割について考える土台となった。

実習では、様々な施設で様々な認定遺伝専門医の遺伝カウンセリングに陪席させていただくことができた。施設によって来談するクライアントのニーズが異なることや、領域により中心となるテーマや遺伝カウンセリングで配慮する点異なることを知った。欲をいえば、遺伝カウンセラーが主体的に行う遺伝カウンセリングに一度陪席してみたかった。しかし、逆に遺伝カウンセラーが主体的に行う遺伝カウンセリングに陪席してしまうと、そのインパクトが強すぎて今後の活動に影響することも考えられる。目の前のクライアントや社会の要請に敏感になり、自分自身で求められる遺伝カウンセラー像を作っていきたいと考える。

講義・実習・課題研究のバランスについては、電話受付実習による時間的制限が大きすぎ、遺伝関連の講義以外のSPHでの選択科目が自由に履修できなかったことが残念だった。また、電話受付や電話フォローアップなど対面式でないクライアントとのやりとりは難しい面があると感じた。将来的には、教育機関でもある京大病院に専属の認定遺伝カウンセラーが雇用され、電話対応を含む遺伝カウンセリング実習で遺伝カウンセラーコースの教育にも携わってもらえると良いのではないかと考える。

研究に関しては、本コースは専門職学位課程の特別コースであり、修士論文ではなく課題研究としての位置づけではあるが、研究に集中的に取り組む時間的余裕が少なく、個人的には本腰を据えてじっくり取り組みたかった。そのため、博士後期課程を受験し、進学することにしたが、博士課程の分野には遺伝カウンセリングの領域が設置されておらず、指導教官が所属する医療倫理学の分野を選択した。できれば、今後遺伝カウンセラーコースの博士課程を設置して欲しいと思っている。というのも、意思決定のあり方はアメリカと日本では異なるといわれており、保険制度や遺伝に対する偏見・タブー視といった社会文化的状況も異なる。従って、アメリカの遺伝カウンセリングスタイルをそのまま日本で適応できるとは限らず、日本人にあった遺伝カウンセリングを確立していかなければならないのではないかと考えるからである。日本の認定遺伝カウンセラー制度は始まって間もないが、臨床現場における実績と同時に学問的発展も必要だと考える。遺伝カウンセリングに対する固定観念がない今だからこそ、社会のニーズに合わせていかようにも変化できる可能性があり、重要性も高いと考える。

2年間育ててくださった諸先生方、クライアントのみなさま、同じ志を持つ遺伝カウンセラーコースの院生のみなさまに心から感謝申し上げます。そして、将来認定遺伝カウンセラーとして社会貢献できるよう努力したいと思います。

## 二年間を振り返っての感想

〇〇 〇〇

京大遺伝カウンセラーコースに入学し、2年が経とうとしている。今改めて2年間を振り返ると、本当に様々なことを学び、大きく成長することができたと思う。これまでとは、全く異なった分野の勉強であったが、自分が学びたい事を思う存分に学ぶ事ができた、この環境に大変感謝している。SPHの他教室の方々と、様々なディスカッションやグループワークを通して学びあえたことは、とても貴重な経験となった。また、そこで出会った友人はとてもよい刺激を与えてくれた。そして年代の異なる方々と、机を並べて勉強するという事もまた私にとって視野を広げたり、社会性を身につけるといった点でもよい勉強となったと思う。SPHにいたからこそ学べた事、出会えた人がたくさんいたと本当に思う。

遺伝カウンセラーコースでの勉強については、大変忙しかったが充実した2年間であった。1年次前期にはとにかく知識を得た。経験豊富な先生方の授業はとても興味深いものであったし、大変ではあったが楽しく勉強できた。後期からは緊張の中で実習が始まった。私は実習が一番大切な勉強だと思っている。実習は、「クライアントは学生の勉強のために来ているのではない」ということは、よく分かっている。「学生が対応した事で、クライアントに迷惑をかけることがあってはならない」といくことも、十分に分かっている。しかし、将来実際に遺伝カウンセリングを行う日が来ることを考えると、陪席のみでは不十分であると思う。もちろん陪席のみではなく、学生が主に担当できる場面を用意して下さる実習も経験させていただいたが、そうでない実習も多かった。先生方がされるのを「見る」のと、実際に自分が「実施する」のとでは全く違うと思うので、何らかの形で、学生がもっと参加でき、少しでも経験を積めるような実習ができれば、より充実したものになると思う。また、実際の遺伝カウンセリング場面ではそういったことが不可能ならば、ロールプレイを継続して行うなどの工夫が必要だと思う。2年次前期までは実習に入る事ができるが、後期からは継続症例がない限りまた、課題研究と関係のある症例がない限りは、実習入る機会がなくなってしまう。2期生では月1~2回程度ゼミを開き、ロールプレイを行おうという取り組みもあったが、実際には課題研究の追い込みのためそういった時間的・精神的余裕がない、研究実施のため4人の予定が合わないといった事情から、実現することはできなかった。但し、決して課題研究が大事でないといっているわけではない。課題研究を行ったからこそ、研究とはどのようなものなのかを学ぶことができたし、遺伝カウンセリングを実習とはまた少し違う視点で捉え、深く考える事ができた。その事は今後、遺伝カウンセリングに携わる上で必ず活かす事ができると思う。ただ、無理のない体制のもと、やはりもう少し現場を体験することができると、より良かったと思う。

最後に、同期に恵まれていた事には心から感謝している。これまで、支えあい、励ましあいながら切磋琢磨してこられたことは、今後の大きな財産となると思う。また、お世話になったたくさんの先生方にも心より感謝いたします。今後ともよろしくお願い致します。

## 遺伝カウンセラーコースで学んだ2年間を振り返って

遺伝カウンセラーコース M2

〇〇 〇〇

大学院生活 2 年間を振り返ると、非常に多くのことを学び、知識の量、考え方、いろんな先生方とのつながりなどが、入学前とは比べ物にならないくらい増えたことを実感しています。学んだことが身についているかは別として、人類遺伝学を始め、コミュニケーションスキル、医療倫理、臨床研究、疫学、統計学など本当に幅広い分野について学べ、「どこにどんなことに精通している先生や研究している人がいて、みんなとても頭がよくて、聞けばすごく助けてくれる」ということがわかっただけでも、入学した価値があったなあと思います。

コースワークは本当に厳しいものがありましたが、少人数の学生にたくさんの先生がついて、丁寧に教えてくださり、わからないことがすぐに聞ける恵まれた環境でした。先生方が、それぞれの得意分野を持った（個性あふれる）見識の広い方ばかりで、実習の場面でも授業や課題研究の場面でも、ひとつの私の疑問に対し、全然思いの及ばなかった視点から意見を下さることばかりで勉強になり、本当に楽しかったです。実習は、実習場面を思い出すと止まらなくなっていて情報が過剰になり、記録の整理に手間取ることが多く、なかなか本質的な振り返りや勉強をする時間を取れなかった気がして、残念だった面もありました。しかし、実習自体は、緊張もしたし、悩むことも多かったけれど、クライアントの言動や問題、先生方の反応や説明などから学ぶことがはるかに大きく、バラエティに富んでいたもので、意欲的に取り組み、大きな学びになりました。

課題研究への取り組みは、1年生の冬と早い時期から始められたことやいくつかの学会で発表させてもらったことで、問題意識を持って長期にわたり取り組めたことはよかったです。その割には、調査対象や分析方法の選定に悩んだり、行き詰ることも多く、なかなか進まなかったことも思い出されます。何度も SPH の先生方が言われていたことですが、「研究はデザインが命」というのが骨身に染みた経験でした。調査を通し、多くの学外の先生方に出会えたこと、いろいろな意見を伺えたことは、今後の活動に大きな意義があり、ありがたいことでした。課題研究の発表での先生方のコメントを聞いていて、「現実的に意味があり、焦点のあった目的を設置すること」「目的と方法が合致していること」「その結果から言えること（考察）を的確に判断すること」の大切さを再確認しました。今後研究や調査を行っていくときには、なかなか基本の「き」の字を教えてくれる人は少ないので、SPH で学んだ意義を感じた強烈な“メッセージ”でした。

2年間の講義や実習、研究活動を通じ、遺伝カウンセラーに求められていることやできること、それぞれの疾患特性に固有の遺伝カウンセリングと共通することなどが、少しずつ見えてきた気がします。学んだことを生かし、クライアントや社会に還元できるような役割になれるように、これからも学会やセミナー、先生方・遺伝カウンセラー（卒業生・院生含む）とのつながりを通じて勉強を続けたいと思います。

## 感想文：ユニットでの1年間を通じて

2009年2月6日

臨床研究コーディネータコース

M1 ○○ ○○

充実したカリキュラムのおかげで、あっという間の一年でした。遺伝カウンセラー・コーディネータユニットがある社会健康医学系専攻（以下 SPH）には、魅力的な講義が多くあり、多くの講義をとりたい気持ちになります・・・が、一つ一つの講義が濃厚なので、受講し過ぎると完全にキャパシティオーバーになってしまいます。できるだけ必要な講義に絞って受講していましたが、それでも講義や課題レポート、試験や発表準備などに日々追われ続け、夢でうなされるほど大変でした。しかし、やめたいと思ったことは不思議と一度もありません。理由を考えてみると、

### 1. 内容が専門的！

大学院なので専門的なのは当たり前ですが、今学んでいることが将来役立つものばかりで、自然とモチベーションが高まりました。また、専門知識だけでなく、プレゼンの仕方や物事の論理的な考え方などを学べるのも大きな魅力でした。

### 2. 講義が面白い！

グループワークや発表など、自分で考え、周りとは相談しながら物事を進めていく参加型の講義が多かったです。SPHには医療従事者だけでなく、様々なバックグラウンドを持つ学生が所属しているので、多種多様な考え方に触れることができ、自分にはない視点に気付かされ、刺激的な毎日でした。また、社会人経験者の方が多く、新卒の私にとって勉強になることばかりでした。

### 3. 周りの人たちの大きな支え！

将来の目標となるような尊敬できる先生方、いつも優しく助けて下さる先輩方、そして苦勞を共にし、協力してきた同期の方が私を支えてくれました。このことが、一年間走り続けることができた最大の理由です。

今年一年間で本当に多くのことを学びましたし、多くの経験をさせていただきました。一方で、自分の弱点も見えてきました。残りはあと一年間、今まで以上に多くのことを吸収しつつ、自分に足りないものを補っていきたいと考えています。そして、ここで学んだことを活かし、社会に貢献できるように精一杯努力していくつもりです。

## 臨床研究コーディネータコースに入学して

2008年4月入学 M1 臨床研究コーディネータコース ○○ ○○

大学で生命科学を学び、医療の分野でヒトに関わる研究に携わりたいという強い思いから、臨床研究コーディネータコースに入学しました。私は、非医療系のバックがラウンドであったため、入学前は医学研究科の中で勉強していくことに不安がありました。しかし、臨床研究コーディネータコースがある社会健康医学専攻は、さまざまなバックグラウンドの方々に構成されており、今では非医療系であるという強みが生かされています。

前期は講義中心で、空き時間も課題に追われるというハードな生活でしたが、興味深く質の高い授業でとても充実したキャンパスライフを送ることができました。社会健康医学専攻の授業は、講義だけでなくグループワークや発表などの参加型のものが多いという特徴があり、私にとって自分を成長させてくれるものであったと感じています。これは、さまざまなバックグラウンドをもった同期や先輩方とディスカッションする中で、周りの人の意見を聞いて自分を表現する力やプレゼンテーションのスキルも身につけることができたからです。いろいろな考えを持った人と交流することで、視野が広がるとともに刺激を受けられることが、このコースの魅力だと言えます。後期になると実習や学会に参加する機会が多くなり、前期や後期の授業を通して得られた知識について、自分の目で確かめることができました。特に、新卒者である私にとって、座学で得たことを応用する過程を実感することは新たな経験になりました。これらは、普段の授業以外に参加するものであるため、よりハードな生活にするものですが、学外の先生方や実際に臨床研究に携わる方々のお話を聞くことや業務を見学できることは、とても貴重な機会だと感じています。

このようなハードスケジュールにも関わらず、ここまで頑張ってくることができたのは、お互いに励まし合う仲間たちと熱意ある先生方に恵まれたからです。臨床研究コーディネータコースのメンバーは社会経験やバックグラウンドがさまざまですが、授業の疑問点や研究に関する問題点について、積極的にディスカッションすることが多いです。このことは、バックグラウンドの違いからお互いに補い合うことができ、コース全員が一つの目標に向かって成長しようとする姿勢を表しています。また、先生方も各々の領域でプロフェッショナルな方々ですので、最先端な知見や専門的なスキルをダイレクトに教えていただけます。ゼミや研究発表会などでは、研究の論理的な思考力を養うとともに、プレゼンテーションやコミュニケーション力も身につけられるよう、熱心な指導が行われます。来年度からは課題研究が始まりますが、教えていただけるもののできるだけ吸収して、より成長した職業専門人になりたいです。

## 遺伝カウンセラー・コーディネータユニットでの1年間

### 臨床研究コーディネータコース

〇〇 〇〇 (M1)

大学院に入学しての1年間はあっという間に過ぎてしまいました。入学式の日  
に時間割とシラバスをもらい、あくる日から授業が始まりましたが、それが怒  
涛の1年の幕開けとなりました。会社勤めをしていたときなら1回数万円の受  
講料を払わなければ聞けないような講義を朝から晩までおしげもなく聞かせて  
いただき、まるでフルコースの料理を1日3食ずっと食べさせていただいたよ  
うな気分です。

講義についてはいろいろな方面からの招待講師の方々のバラエティに富んだ話  
が聞けたことが良かったと思います。しかしこの場合、いろいろな話を聞けた  
という長所はありましたが、先生が毎回変わるので、授業が終わったあとで生  
じた疑問点や資料を読み直したりして新たに生じた疑問点を質問する先が  
なかったことが少し残念でした。一方、同じ先生が前期・後期をとおして焦点  
のぶれない講義をしてくださったことも自分にとってはたいへん良かったと思  
います。この場合、担当教官の先生が毎回の講義で生じた疑問点だけでなく、  
授業が進んでいって初めて生じた質問に対しても、その都度ていねいに答えて  
くださったことが大変良かったと思います。

また、講義をきっかけに入学する前はあまり興味を持っていなかった方面にも  
新たに興味がわき、本を購入して読み始めたりしたことは思わぬ収穫だったと  
思います。

前期にコアの科目が固まっていたので、テストやレポートが集中した時期は  
少々しんどかったです。この時期はテストやレポートに終われ、習ったことを  
じっくり咀嚼する時間がとれず残念でした。しかしこれは学生である以上避け  
られないことなので、仕方のないことだと考えています。

今は1年間学んできたことをもとに、いろいろ考えを巡らせることがとても楽  
しい毎日です。講義中にいただいた資料や時間に追われて読めなかった参考図  
書を、できるだけ春休みのうちに読んでみたいと思っています。

前期は SPH の講義も含めて、様々な分野を広く学んでいたという感じですが、後期は一気に専門性が濃くなりました。以下、受講したユニット関係の講義についてです。

〔前期〕

・臨床研究概論・・・臨床研究を基礎から学ぶ講義です。今になると、この講義がすべての基礎になっていると改めて理解できます。専門職として、この講義で学んだことは、絶対に忘れてはならないと思います。

・遺伝医療と倫理・・・私は、この講義は医療倫理の中の一つとして考えていました。遺伝医療における様々な場合の考え方だけではなく、実際の倫理のあり方を学んだような気がします。

・基礎人類遺伝学・・・興味はあるのですが、高校で理科 I までしか学んでいない私には、難解な講義でもありました。ゲノム研究を考える際には欠かせない講義と思います。

・遺伝医療と社会・・・毎回、講師が変わり、変化のある講義でした。全く知らない分野の講義は、新しい世界を知ることができ、興味深いものでした。

〔後期〕

・臨床研究専門職のためのコミュニケーションスキル・・・隔週開催で講義回数が少なく、残念です。医療の現場を知らない私にとって、この講義は欠かせないものです。ディベートや依頼文の書き方、パワーポイントを使った発表の仕方など、実際場で使うことのできる技術を学びました。模擬患者さんとのやり取りでは、何をどう言えばいいのか、どうすればいいのかわからなくなってしまうばかりでした。

・臨床研究方法論・・・前期の臨床研究概論と比して、専門的になりました。概論で学んだことが土台です。概論と同様、外部からの講師の講義もありました。薬について学んだことのない私にとって、薬に関する講義は、「助かり」ました。

・医療倫理学概論 講義と演習・・・前期の遺伝医療と倫理や SPH のコア科目医療倫理学と重なる箇所もありました。医療倫理で使用できる三原則や臨床倫理学の考え方を学ぶことができました。私にとって医療倫理は、つかみどころのないもの、どこをどのように考えればよいかわからないものとして存在していましたので、考えるための道具を得ることができ、満足しています。

同期の仲間や先輩方に出会えたことを感謝しています。

## < 遺伝カウンセラー・コーディネータユニット 感想文 >

臨床研究コーディネータコース ○○ ○○

CRC として働いているときこのコースを知り、もうすぐ入学して一年経とうとしている。当初これほどだと思わなかったが大変忙しかった。しかし、今まで単発の CRC 研修を何回受けても得られないほどの多くのことを学べた。単発で教わっても身につかなかったことが一連の学習で頭に入ったともいえる。職場にもよるが CRC は座学で 2 週ほど学んだあと実地研修があるが十分でないため、経験を積んでスキルは磨けてもやっていることの根拠までは分かり切っていないことが多いと思う。実際自分がそうであり、臨床薬理学会の認定 CRC や SoCRA の CCRP を取得してもわかっていないという思いは強かった。

ここでの講義のありがたさ重要さを一番実感したのは、いくつかの臨床試験関連の学会に参加したときである。講習会ではすでに講義で繰り返し聞いた内容であることも多く、逆に何百人の講習会で話していた講師の先生が授業のときに 20 人足らずの教室で教えていただける機会も少なからずあり質問できるときに喜びを感じた。自分を含めて CRC 自身、臨床試験がどういうものであり研究にどのような問題点があるのかなどを理解していないことに気がついたのも学会のときである。今までを恥じ、ここで学ぶことができたことはこの上ない財産だと感じた。このコースを是非存続させて多くの CRC に学んでほしいと思う。フルタイムの学生となるのは難しい CRC は多いが、医療機関や企業から年に 1 人でも学ぶことはかなり有益だと思う。また一部の講義だけでも学ぶ機会が現場の CRC に与えられないものかと思う。例えば GCP や SOP (標準業務手順書) に書かれているからではなく、どうしてそのようなことをやるのかという根拠や理由が分かるようになると思う。

具体的に印象に残っているのは臨床研究のコミュニケーションスキルの授業である。CRC にとって大きく求められるコミュニケーションについての講義は実践的であった。実際に模擬患者に対して話をしてその内容を患者さん本人にフィードバックしてもらえ、ほかの学生の説明を客観的に聞いた。このような機会は実際の現場でもなかなか得られない。尊厳死の是非についてのディベートなどでも今まで深く考えなかったことを掘り下げる機会を得ることができた。また、医療倫理での事例検討ではダウン症の胎児役、母親、医師などの役を割り振ってのやりとりを行い立場によって考えがどうかわるかを実感した。業務を行っているときは目の前のことや日本の現状しか見えてこなかったが、医薬品開発の授業などで欧米の試験の仕組みや考え方の違いを学び、日本が世界と比べてどうなのかということも知ることができた。前期の講義のコアの授業は難しく感じることも多かったが、必要性を考えた時臨床試験は医療の中の一つであるということからすると医療の全体や経済面からのアプローチなど多角的に学べて SPH でよかったと思った。

GC とのユニットということで遺伝について勉強できたのもよかった。最近の治験は遺伝子多型の検査の同意をとって薬物代謝を調べたりするので直接役立つこともあるが、それ以外でも最先端の内容などを知ることができ貴重だったと思う。

## SPHで過ごした一年

臨床研究コーディネータコース ○○ ○○

不安を抱えて入学式に臨んでから、早いものでもう10か月がたった。この間、新しい経験ばかりで、本当に刺激的な毎日であった。もちろん、試験やレポートに苦しめられたこともあったが、それも、おそらくもう二度と経験することはないであろうと思うと、今となれば懐かしく感じる。

授業の一つ一つをとっても、著名な先生方にご講義いただき、貴重な機会を与えていただいたという感が強い。また、これがSPHの特徴の一つだと思うが、さまざまな分野の先生のお話を聞いたことが非常に興味深かった。授業を受けるまでは大して興味のなかったことであっても、新しい知見を得られて興味をひかれたり、その時は興味もなかったとしても、後に他の授業で「あ、この話聞いたことがある」という感じで、その授業への理解が深まったりしたこともあった。ここでは、自分のアンテナを広げておけば、本当にいろんな情報をキャッチすることができると思う。そして、その情報を活かすも殺すも自分次第だと思う。せつかく得た情報、機会なのだから、少しでも自分の身となるようにしたいと思った。

先生方も、大学の時の講義とは違って、学生が今後研究するにあたって役立つようにしよう、学生を指導しようという気持ちが感じられた。大学の時は、ただ自分の研究テーマを淡々としゃべっているという感じだったので、この授業はとて先生方の意欲を感じられるものであった。

また、ユニットのメンバーももちろんであるが、ほかの講座の学生たちも、職種や経験、経歴、興味が多種多様で、話をしているととても興味深かった。人の興味の多様さを実感するとともに、それぞれに優秀な人が集まっていたため、それに感化され、自分も頑張らねばと思えたことは非常によかったと思う。

入学するまでは、仕事を辞め、2年間という時間と数十万のお金をかけてまでくる意味があるのか、正直自分の行動が愚かに思える時もあった。しかし、今振り返ってみて、その価値は十分あったと思える。授業は大変だったが、これからの一年は授業がなくなり、他の講座の学生たちともあまり会えなくなるのが少し淋しいと思う。ここで得た人脈を考えただけでも、ここに来てよかったと思える。

これまでは与えられたプログラムをこなすのに精一杯であったが、これからは、自分で考え行動していくことを要求される課題研究が待っている。この一年先生方にご指導いただいたことが生かせるよう頑張りたいと思う。

一年間ありがとうございました。

## 2年間の感想

所属・学年：臨床研究コーディネータコース・M2

遺伝カウンセラー・コーディネータユニットで、また社会健康医学系専攻で2年間学ばせていただき、大学までの学びとは大きく異なった形で知識だけでないたくさんのものを得ることができました。1年目は講義や実習が主となるカリキュラムでしたが、その中では教員の先生方や共に学ぶ院生の多様な経験やその専門性に触れることができました。これまであまり興味を持つことのなかった分野についても考えるきっかけを得られたこと、また、自分のこれまで学んできたことや考えていたことを改めて多角的な視点で見直すことができたことが今後につながる有意義な点であったと感じています。

2年目の学外における実習では、大学の中で話を聞いているだけでは分からない部分を実際に知ることができました。国立がんセンターや静岡がんセンターでは医療現場における医師やCRCが患者さんと接する場に立ち会うなど、他ではなかなかできない貴重な体験をさせていただきました。外から見ただけの単なる見学ではなく、その中に入って考えることのできる実習であったため、考えたこと感じたことが自分のものになりやすかったのではないかと今振り返ってみて感じています。2年間を通して、ただ話を聞くだけの一方的なものではなく、講義や実習の中では他の院生や教員とともにいろいろな問題などについて考え、また実習を通して実際の現場に触れられたことで、修了後に自分が働いていく中で考えるための助けとなるものを得られたことが最も価値のある点であると思います。

また、課題研究として自分の興味を持った課題について研究を計画しなんとかやり遂げることができたことも大きな経験となりました。講義などを通して様々なことを学び、知識や手法について得ることができましたが、実際に今後それらを活用していくためにどうすればいいのかを考えることができたのが課題研究であったと思います。これまであまり臨床で働いたり研究したりすることのなかった自分にとって、問題意識を持って研究を計画するという事は容易ではありませんでした。疑問に思ったことをどのように解決していけばいいのか、意義のある研究をどのように計画していけばいいのか、どのような場で何を行えばいいのかを最初から考える中で、改めて学んだことの必要性を確認することができました。一人でやるには難しい部分を、コースの先生をはじめ研究に協力していただいた医療機関の方など多くの人に助けていただきながらではありましたが、主体的に研究を進めていくことで、自分のやるべきことを考えそれを行うことの難しさを知ることができました。他の大学院ではなく、この臨床研究コーディネータコースだったからこそ学ぶことのできた点であったのではないのでしょうか。

ここで得られた考える力を活かしながら、これからも様々なことに取り組んでいきたいと思っています。また、これから入学してくる人にとっても、ここで学べてよかったと感じられるような大学院であってほしいと思います。

## 2年間の感想

臨床研究コーディネータコース M2 ○○ ○○

臨床研究コーディネータ(CRC)コースの2年間は、講義・実習・研究と、一言でいうと非常に忙しい日々でした。入学後、自分の思い描いていた内容とのギャップに、思い悩む日々もありましたが、社会健康医学系(SPH)の友人や先生方のおかげで、挫けずに続けることが出来ました。

1年目はまず、大学院なのに講義の多さに驚きます。前期は、コアの科目をはじめとしてSPHの各分野の優秀な先生方が担当されており、非常に中身が濃く有意義なものとなっていました。社会健康ということをあまり意識せずに入學したのですが、疫学や環境など、興味深い講義も多くありました。同時に、レポートとテストに追われる日々となり、ハードな日々となりました。せっかくの中身の濃い講義なのですが、CRCコースでは必修講義が非常に多く、もう少し掘り下げて勉強したいのに、こなすだけに精一杯になってしまったところもあり、残念に感じるところもありました。

後期は、他の分野SPHの講義に加え、CRCコースの専門が増えました。CRCコースの専門では、倫理や患者対応など、病院での医療スタッフに必要な内容が多くなりました。次の2年次の実習も病院が中心になり、病院でのCRCを希望している人には、よい内容かもしれません。そして実習に行き感じたことは、やはりCRCというのは、治験コーディネータを指しており、看護師が望まれているということでした。現在のCRCコースの体制について思うことは、今のように倫理や患者対応など病院での医療スタッフを意識したものであるのであれば、入学資格を医療者に限る方がよいと思いました。そうではなく、非医療者や文系の人にも門戸を開くのであれば、病院だけでなく企業や研究所などで、もっと幅広く臨床試験に関わる人材の育成を目的として、製薬企業での開発経験者などを先生とした講義なども開講すればよいのではないかと思います。そして就職支援も必要だと思います。

私自身は、入学当初は研究機関で臨床研究をマネジメントするコーディネータが出来ればと思っていましたが、治験以外の臨床研究・臨床試験をマネジメントするには、CRCやモニターなどの豊かな経験と、きちんとした組織、制度が必要となることが分かりました。そのため、今の自分では経験不足のため、臨床研究をマネジメントするのは難しいと感じました。同時に、病院実習では現在のがん治療の3本柱である外科療法・化学療法・放射線治療の理論を座学で学び、医療機器や手術、通院治療を見学することにより、実際にどのように現場で行われているのか知ることができました。治療法の進歩は早く、今後は様々な新しい治療薬、治療法とも組み合わせていくことになると考えられます。また、予想していたよりがん患者の年齢も若く、副作用の少ない新薬の開発、がん領域での臨床試験の重要性は今後ますます高くなるだろうということを感じました。そこでもう少し医学の勉強をし、がんの研究に携わりたいと思うようになりました。そして研究者もしくは教育者として、基礎研究を臨床に応用していく支援をしていきたいと思うようになりました。

遺伝カウンセラー・コーディネータユニットで過ごした2年間を振り返って

臨床研究コーディネータコース M2

〇〇 〇〇

臨床研究コーディネータコースで過ごした2年間を振り返ると、とても充実した2年間であり、ここで学んだことは、今後の人生に大きく影響すると思います。

入学当初は、大学を卒業してすぐの何の経験もない私にとって、幅広い年齢層やさまざまなバックグラウンドの人と講義を受けることは、大変でした。経験のある人たちに圧倒され、その人たちについていこうと焦ってばかりいました。2年目は、研究と実習が中心の生活になり、ゆっくり考える時間が持てたり、実際に医療現場や製薬会社で働く人と話をしたりできたことで、CRCとして働くことがイメージできるようになり、心に余裕ができました。実習では、医療現場、製薬会社、データセンターそれぞれの立場での仕事を見学でき、お話を聞いたことで、自分の目指す職種のことはもちろん、これから働く上で関わる職種のことを理解できました。どの立場で働く際にも、その他の職種について理解しておくことは重要だと思います。

指導教官の指導はとても厳しく、くじけそうになることもしばしばありましたが、私を立派なCRCに育てようとしてしっかり指導して下さったことは本当に幸せだと思っています。そして、CRCとして必要なスキルや考え方だけでなく、自ら問題点を見つけて研究することを教えていただいたことも本当によかったです。また、京都大学の社会健康医学系専攻の中にあるコースということで、ユニットの先生以外にも多くの優秀な先生方の講義を受けることができたことや、学会や実習にも十分行かせていただいたことも、とてもよかったと思っています。優秀な先生方をはじめ、素晴らしい先輩、同期、後輩と出会え、このようないい環境で学べたことに感謝しています。

卒業後はここで学んだことを医療現場で活かして、補助的な作業にとどまらず、研究の適正かつ円滑な実施のために自ら考えて行動できるCRCになりたいと思っています。また、ここで学んだことを後輩に伝えていくことも、重要な使命だと思っています。